



迎賓館設立の沿革

迎賓館は、かつて紀州徳川家の江戸中屋敷があった場所に10年の歳月をかけて、明治42年(1909年)に東宮御所(皇太子の居所)として建設されました。建物は、地上二階、地下一階で、幅125メートル、奥行き89メートル、高さ23.2メートルと広大なものです。

明治時代の建築家片山東熊(かたやま とうくま)の総指揮の下に、当時の一流建築家や美術工芸家が総力を挙げて建設した、日本における唯一のネオバロック様式の西洋風宮殿建築です。

この建物は、昭和天皇や今上陛下が一時期お住まいになった以外、東宮御所としてあまり使用されることはなく、戦後、建物・敷地ともに国に移管され、国立国会図書館、内閣法制局、東京オリンピック組織委員会など、国会や行政の機関に使用されていました。

戦後十数年経って、外国の賓客を国として接遇するための施設の必要性が高まったため、5年有余の歳月と108億円の経費をかけて村野藤吾の設計で改修が行われ、昭和49年(1974年)に現在の迎賓館赤坂離宮が完成しました。

開館以来、世界各国の国王、大統領、首相などの国・公賓がこの迎賓館に宿泊し、歓迎行事を始め首脳会談、要人との会談、晩餐会の開催など、華々しい外交活動の舞台となっています。また、先進国首脳会議(1979、1986、1993年)、日本・アセアン特別首脳会議(2003、2013年)などの重要な国際会議の会場としても使用されています。

なお、平成21年(2009年)、創建当時の建造物である迎賓館赤坂離宮の本館、正門、主庭噴水池等が明治維新以降の建造物としては初めて国宝に指定されました。



和風別館

洋風の迎賓館赤坂離宮(本館)の東側に位置する別館「游心亭」は、和風の意匠と接遇で外国の賓客をお迎えする施設として昭和49年(1974年)に谷口吉郎の設計で新設されました。



京都迎賓館

東京(元赤坂)に位置する迎賓館赤坂離宮と併せ、日本の歴史、文化を象徴する京都において、外国の賓客を和のしつらえ・おもてなしでお迎えする場として平成17年(2005年)に建設されました。

(<http://www8.cao.go.jp/geihinkan/kyoto/koukai-kyoto.html>)



〒107-0051 東京都港区元赤坂2丁目1番1号

電話: (03)3478-1111(代表)

<http://www8.cao.go.jp/geihinkan/index.html>

2017年9月現在



迎賓館

赤坂離宮



玄関ホール・中央階段



国・公賓は、正面玄関から入り、イタリア産の白い大理石、宮城県産の黒い玄昌石が市松模様張りで敷き詰められた玄関ホールを通っていきます。

玄関ホールの左右にはそれぞれ、2基の美しい大燭台と、赤褐色に黒い斑点が入ったフランス産の花崗岩で作られた2本の大きな円柱が立っています。

中央階段前の玄関小ホールより東西玄関に至る回廊の床には、11種類の大理石による円形の中に羅針盤のような幾何学模様をかたどったモザイクが施されています。

中央階段は、段部にイタリア産白色大理石ビアンコ・カララが張られ、階段の左右の壁面には、玄関ホールと同様にフランス産の大理石ルージュ・ド・フランスが鏡張りされています。



花鳥の間

「花鳥の間」という名は、天井に描かれた36枚の絵や、欄間に張られたゴブラン織風の綴織、壁面に飾られた30枚の楕円形の七宝に、花や鳥が描かれていることに由来します。

周囲の腰壁は茶褐色の木曾産のシオジ材で板張りしてあり、その壁の中段を飾るのが七宝です。下絵は日本画家の渡辺省亭(わたなべ せいいてい)が描き、明治期の七宝焼の天才・清川惣助(なみかわ そうすけ)が焼いたものです。

部屋の装飾はアンリ2世様式で、天井には、格子状の区画にフランス人画家が描いた花卉鳥獣の油絵24枚と金箔地に模様描きした絵12枚が張り込まれています。シャンデリアはフランス製で、重量は迎賓館のなかで一番重く約1,125kgもあります。

この部屋は、主に公式晩餐会が催され最大約130名の席が設けられます。また、それ以外にも首脳会議等の場としても利用され、昭和61年(1986年)の第12回主要国首脳会議(G7)はこの「花鳥の間」で開催されました。



(注) 1. コロン織 別名タペストリーともいう。15世紀頃にパリで染物業を営む「コロン」家の兄弟が造った織物。

(注) 2. シオジ モノサイ科トネリコ属

(注) 3. シャンデリア 迎賓館のシャンデリアは、すべてフランス製で明治41年(1908年)アントワープより輸入されている。器具の金属部分は黄銅製織物や引き物で、飾り金物は動物や人の顔、植物など具事な彫金で造られている。電球用のセードは火災、花びら、グロウフ形で、装飾用ガラスは木の葉、王形、剣先形にして取り付けられ、その形状は客室の仕様と完全に一致している。

2階大ホール・朝日の間

※「朝日の間」は、天井絵画等の内装の改修工事のため、平成29年2月15日から約2年間(予定)閉室しています。



中央階段を上ったアーチ天井の南北には、南側に朝日が昇る風景を、北側に夕日が沈む風景の油絵が対で描かれており、その中央には菊の御紋章が飾られています。

2階大ホールの約8mの高さがある天井は、イタリア産の8本の大理石の大円柱によって支えられています。

2階大ホールの天井には、昭和49年(1974年)改修時に東京芸術大学の寺田春式(てらだ しゅんいち)教授によって「第七天国」という絵が描かれています。同じ年、「朝日の間」の扉の左右の壁面に掲げられている2枚の大油絵が小磯良平(こいそ りょうへい)画伯によって描かれ、左側が「絵画」、右側が「音楽」と題されています。

「朝日の間」という名は、天井に描かれた「朝日を背にして女神が香車を走らせている姿」の絵に由来します。周囲の16本の円柱はノルウェー産の大理石です。

壁には、京都西陣の金華山織の美術織物が張られ、床には、紫色を基調とした47種類の糸を使い分けて桜花を織り出した緞通が敷かれています。

この部屋は、国・公賓用のサロンとして使われ、ここで表敬訪問や首脳会議等が行われています。



羽衣の間

「羽衣の間」という名は、謡曲の「羽衣」の景趣を描いた300坪の曲面画法による大絵画が、天井に描かれていることに由来します。

室内は、フランス18世紀末のルイ16世様式で、当館で最も大きな部屋となっています。3基のシャンデリアは当館で最も豪華なもので、およそ7,000個もの部品で組み立てられており、高さは約3メートル、重さは約800kgあります。壁は楽器、楽譜等をあしらった石膏の浮彫りで飾られています。また、正面の中二階はオーケストラ・ボックスがあり、かつて、この部屋が舞踏会場として設計されたことが偲ばれます。

この部屋は、雨天の際の歓迎行事のほか、レセプションや会議場等として使用されており、また、晩餐会の招待客に食前酒や食後酒が供されるところでもあります。

彩鸞の間

「彩鸞の間」という名は、左右の大きな鏡の上と、ねずみ色の大理石で造られた暖炉の両脇に「鸞」と呼ばれる架空の鳥をデザインした金色の浮彫りがあることに由来しています。

白い天井と壁は金箔が施された石膏の浮彫りで装飾され、10枚の鏡が部屋を広く見せています。室内の装飾は、19世紀初頭ナポレオン1世の帝政時代を中心にフランスで流行したアンピール様式となっており、石膏金箔張りが施された鏡、兜、剣など軍隊調のモチーフで装飾されています。天井は床面から約9mあり、楕円形のアーチ状のレリーフは天幕を張ったように見せる意匠となっています。なお、椅子張り裂地の赤はアンピール様式のトレードマークと言えます。

この部屋は、本来、表敬訪問のために訪れた来客が最初に案内される控の間として使用されるほか、現在は首脳会議や、条約協定の調印式、国・公賓のテレビインタビュー等に使用されています。